



「あわ／さぬき 借耕牛探訪記」

# 「借耕牛」の歴史伝承へ

## 調査研究30年の成果冊子に

借耕牛は江戸時代中期から1970年まで約50年間続いた慣習。放牧地に恵まれ多くの牛を飼育していた徳島の山村農家と、労働力が不足していた香川の小規模農家が牛の貸し借り契約を結び、香川の農家は賃料として玄米を徳島の農家に支払っていた。全国各地



富田紀久子さん

に同様の慣習があったが“阿讚の借耕牛”は全国でも最大規模で、最盛期の40年ごろは年間約8500頭が讃岐山脈を越えて香川に来ていたとい

う。

富田さんが借耕牛の存在を知ったのは今から30年ほど前。知人から「借耕牛の絵を描いてほしい」と依頼されたのがきっかけだった。その後、町村史や文献などで調べ始め、国立国会図書館にも出向いた。2007年8月、同市塩江町の竹林でそら豆の形をした借耕牛の墓を見つけたのを機に活動を本格化。相栗峠や三頭峠など八つの峠を現地調査したり、知り合

いをたどって借耕牛に関わった両県の約100人に聞き取りを行ったりした。

「調査から浮かび上がったのは、過酷な労働を強いられた牛たちの姿だった」と富田さん。丸々肥えていた牛は昼夜を問わない耕作で次第にやせ細り、貸主の元に帰る際は骨が浮き出た背中に重い米俵を乗せられて歩くのがやつとのようだったといふ。

富田さんは「高齢化とともに借耕牛の記憶も風化が進んでいる。数多くの牛たちが命をかけ香川の農業を支えてきたことを大勢に知つてもらいたい」と話している。

A4判カラーの150ページ。1500部を作成し希望者に3300円で販売するほか、県内の図書館や小中高校、コミュニティセンターなどに寄贈する。問い合わせは富田さん、電話〈080-7950-3236〉。

## 高松のデザイナー 富田さん

香川の田畠を耕すため、かつて農繁期に徳島の山村から借り出され讃岐山脈を往来した借耕牛の歴史を伝え残そうと、高松市今里町のデザイナー・富田紀久子さん(77)が、約30年にわたる調査・研究成果をまとめた冊子「あわ／さぬき 借耕牛探訪記」(美巧社)を出版した。借耕牛で生計を立てたり、牛追いを仕事にしたりした当事者の証言や同市に残る牛の墓の探訪記などを収録しており、貴重な郷土史として注目されそうだ。